

「あゆ」生育調査 ②



魚沼漁協では、昨年引き続き管内におけるあゆの生育状況、釣果等について把握するため「あゆ生育調査特別委員会」を設置しました。内水面水産試験場では、釣獲調査で採捕されたあゆの測定および種苗の産地判別を行いました。ここでは、平成二十五年度の結果について報告します。

生育調査は、平成二十五年七月十日から九月十一日までの約二ヶ月間に計十回実施。十地区、のべ約百人の調査員が一人当たり一日四時間の友釣りによる釣獲調査を行いました。採捕されたあゆは内水面水産試験場が、全長、体重を測定し、体側の鱗数から種苗の産地を判別しました。調査区は昨年と同じ湯沢、石打、塩沢、六日町、城内、大和①（五日町近辺）、大和②（浦佐）、小出①（虫野近辺）、小出②（小出駅近辺）堀之内の計十地区です。

採捕したあゆは、琵琶湖産が全体の一七％となる九七尾（平均約一五・四cm）、人工産が五七％で三二二尾（平均約一五・二cm）、天然産（野積産を含む）が二六％で一四九尾（平均約一五・六cm）でした。琵琶湖産あゆの割合は昨年の約二分の一となり、その分人工産が増加していました。本年は天候不順の影響等もあり、昨年よりも釣獲尾数が少なく、また小型のあゆの割合が多くなっていました。

全十回の調査で採捕されたあゆの総数は、五六七尾でした（平成二十四年七九四尾）。これらの産地組成について図1に示しました。

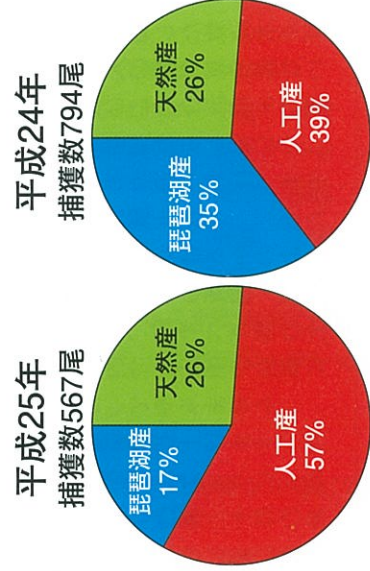
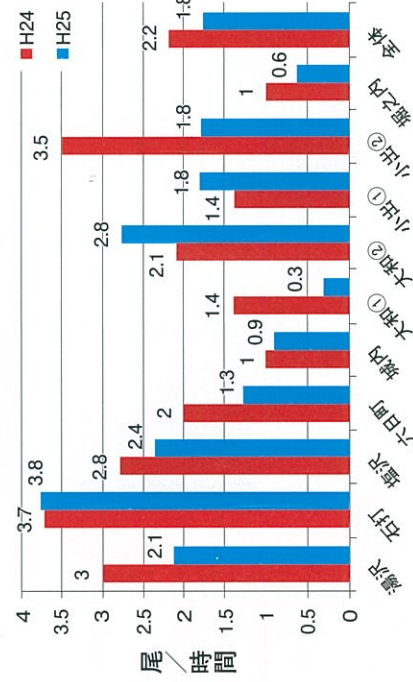


図1 採捕されたあゆの産地組成

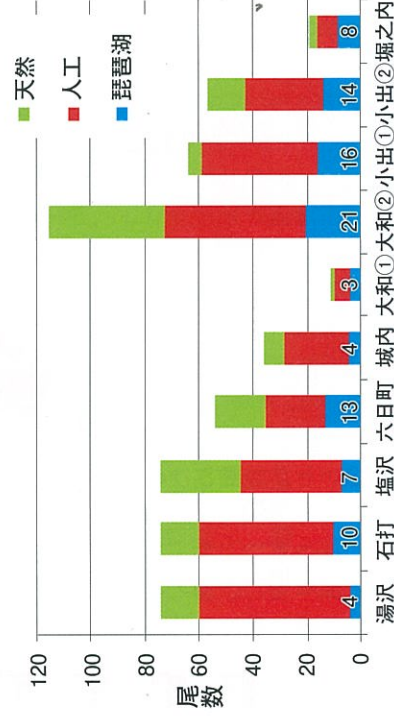
図2 地区別釣果



次に地区別の一時間当たりのあゆ採捕尾数の結果を図2に示しました。

調査期間における全体の採捕尾数の平均値は、一・八尾でした。地区別では、上流部（塩沢より上流）で平均二・七尾、中流部（六日町から大和②）で一・三尾、下流部（小出①より下流）では一・四尾といずれも昨年より少ない結果となりました。

図3 地区別採捕尾数と産地組成



本年は、雨が少なかった昨年とは打って変わり七、八月の降水量が多く、天候不順な夏となりました。大雨による出水も多く、河川内に濁りが残ることが多かったことから、あゆには厳しいシーズンだったようです。本調査は、来年度まで継続して行われる予定であることから、引き続き魚野川におけるあゆの動向について継続的な調査を続けていきたいと考えています。

次に放流後の釣獲あゆの産地組成について調べました（図3）

本年も琵琶湖産あゆは、最上流部の湯沢地区を含む全調査地点で確認されたことから、放流後は河川内を自由に動き来していることが示されました。